



いれずみ物語

— 29 —

小野 友道

いれずみは他人の手を借りた自傷行為 — THE ILLUSTRATED MUMの場合 —

ドルフィン は 10 歳の女の子、ブスで友だちもできない。父親の違う姉スターは美人で成績もよい。二人は未婚のママ、マリーゴールドと 3 人で暮らしている。ママは美人でデザインの才能に恵まれているが、生活保護暮らしでアルコール中毒気味。かなり精神不安定で、全身にいろんなタトゥーをしている。幼いころ、教会の養護施設で暮らしていたママは、子どもたちへの愛し方がはなはだ不器用である。ママより娘たちのほうがよほどしっかりしている。

小説『THE ILLUSTRATED MUM』（日本語訳『タトゥーママ』、小竹由美子訳）は、ドルフィンの立場で語られるママの物語である。作者はジャクリーン・ウィルソン（Jacqueline Wilson）、イギリスの人気作家である。

物語はマリーゴールドの 33 歳の誕生日の出来事から始まる。バースデー・ケーキのことで娘スターとごたごたしている。マリーゴールドはいらいらし、またおかしくなってきた。「なんだか、自分が人生の十字路に立っているような気がする。クロス。あ、そうだ。十字架のタトゥーをしたらどうかな？」マリーゴールドの眼が緑に光る。「とても待てない」「つぎからつぎへとタトゥーをするなんてもういやになったって、いったじゃない。レーザー手術でタトゥーをとってもらうためにお金を貯めるって、い

ったでしょ。いったわよね！」「あなたを喜ばせたくていったのよ。あたしはね、自分のタトゥーぜんぶ、大好きなの。あたしにはどれも、特別なよ。これがあると、自分が特別に思えるの」「あたしはいつも、外側のはしっこのところで生きてきたんだから」

なにか事あるたびに、マリーゴールドはそれにちなんだタトゥーをいれる。その白い肌に色あざやかなタトゥーがすでに 12 個もある。心臓の上には、今も未練たっぷりのスターの父親ミッキーの名が彫られている。もちろん娘たちへの思いを込めたいるか（ドルフィン）、そして星（スター）のいれずみもある。今度のクロスも自分でバラや蔦が巻きついたデザインをスケッチした。早速、いつものようにそれを持って、馴染みのレインボー・タトゥー・スタジオへ駆けつけようと、ドルフィンを誘う。「ねえ、お願い。きてほしいの。いたいんだもん」「そんなにいたくないって、いったじゃない」「ひどいといいたいよ。関節のところはどうしてもいたいの」「だったら、どうして……？」「いたい思いをすれば、なおさら特別なものになるのよ」

物語は、いろんな葛藤の末、姉のスターが父親ミッキーのところへ逃げ出すと、マリーゴールドはアルコールに入りびたり。ある日全身に白いペンキを塗りたくった。タトゥーはぜんぶ

ぬりつぶした。「…だいじょうぶ。白くなるの。いいお母さんに、いい恋人になるの。そして、ミッキーがスターをつれて帰ってきて、あたしたちはずっとずっといっしょにくらすの。…スターはタトゥーがきらいだった。スターはあたしがきらいだった。でも、もうぜんぶ消えた」

＊

筆者はこの小説を読むうちに、ふとママのいれずみは、リストカットと同じではないのかと思った。いれずみを入れて、家に帰りワインを空け、ぐっすり寝込んだママは、爽やかに眼を覚ます。そして包帯されたクロスのいれずみをした身体におしゃれをして町のバブに出かける。これはリストカットをした後、耐えられない心の痛みが落ち着くのと似ていてではないか。『自傷する少女』ケイティも、「ためらうことなくハサミの刃を肌にあてた。それから、ゆっくり慎重に切りつけた。ちょっとした切り傷程度のものだけど、自分に負わせたその痛みが彼女をしゃんとさせた。荒々しくコントロールのきかない感情がきえていく。痛みがそうした働きをもたらすのだ」とリストカット効果を見事に述べているが、それと似ている。

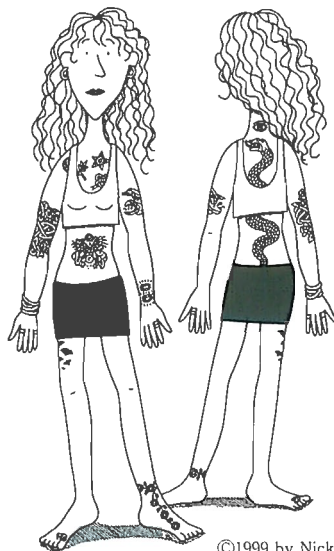
自傷行為とは「意図的に自分の身体を傷つけることであり、それは社会的に受け入れられず、心理的な苦しみを軽減するために行われるという性質を帯びる」としたウォルシュの定義に従えば、マリーゴールドのタトゥーの、少なくともその一部は自傷行為といえるのではない

だろうか。もちろん、タトゥーは他人の手を借りねばならないが。

＊

フランスの精神分析学者ディディエ・アンジュー *Didier Anzieu* は、その著『*Le Moi-peau* 皮膚－自我』のなかで、「皮膚はわれわれの個性を保護するシステムであると同時に、われわれが他人と交流を行うための第一の道具である」と指摘している。そして「精神現象が生物的身体と社会的身体の双方に依託されていると仮定する一方、そうした依託関係は相互的であるとも仮定したい」とも述べ、その上で「皮膚は人間の内部環境の平衡を外部の妨害から守るが、皮膚の形、組成、色合い、傷痕という形で妨害の刻印を保持し続ける。一方皮膚が維持していると考えられる内部環境であるが、皮膚はその大部分を外部に明らかにする。つまり皮膚は他人の目からすると、人間の身体的な健康・不健康を反映しており、魂の鏡ともなるのである。皮膚が自動的に送り出しているこれらの言葉によらないメッセージ」に注目し、それが化粧品、美容整形手術などにより意図的に歪曲したり、くつがえしたりできるとした。であれば、タトゥーもまたその一つの手段といえるのではないか。

鷺田清一が「なにやら身体の深い能力、とりわけ身体に浸透して居る知恵や想像力、それが伝わらなくなっているのではないか。……そんな身体からなにやら悲鳴のようなものが聞こえてくる気がする。身体への攻撃、それを当の身



©1999 by Nick Sharratt

『タトゥーママ』より転載
ジャクリーン・ウィルソン 作
ニック・シャラット 画
小竹由美子 訳
株式会社 偕成社発行
タトゥーママ、マリーゴールド
は白い肌にたくさんのいれずみを
いれている。背中のヘビはお
ふろに入ると本物のように出て
きそうになる。

体を生きているひとがおこなう。化粧とか食事といった、本来ならひとを気分よくさせたり、癒したりする行為が、いまではじぶんへの、あるいはじぶんの身体への暴力として現象せざるをえなくなっているような状態がある」と述べている。

そう、まさしくマリーゴールドのタトゥーも、魂の叫び、身体の悲鳴である。身体への暴力であり、痛ければ痛いほど特別なものになれる彼女のタトゥーである。それは他人の手を借りた自傷行為ではないか。

*

タトゥーママと同じ英国人であるダイアナ妃が、1995年11月、BBC（英国放送協会）のインタビューに答えて、腕と脚を傷つけたことを赤裸々に告白したのをきっかけに、自傷行為は注目を浴びた。「心が痛かった。そして私は心でなく体を傷つけたの。なぜかって？ 私は誰かに助けてほしかったの」とダイアナが語ったのはあまりにも有名である。

「結婚生活の最初の何年間に、ダイアナは数回自殺を企てており、自殺をすると脅かしたことは数えきれない。あるときは、ケンジントン宮殿のガラスの陳列棚に身を投げかけ、またあるときは剃刀で手首を切った。レモン・スライサーのぎざぎざの刃で我が身を傷つけたこともあるし、チャールズ皇太子との激しい言い争いの最中に、皇太子のサイドテーブルに置いてあったペナナイフを取り上げ、自分の胸と腿を切ったこともあった」

自傷行為を行う目的として幾つか挙げられている。1) 周囲の目や気を引こうとして行う、2) 儀式として行う、3) 自己を認識するための手段、4) 痛みによって助けを求めるための手段、5) 現実逃避の手段、6) 自分を他人にする手段、7) 自分自身の存在をなくする手段、としてである。ダイアナの自傷行為は、ほとんどチャールズの目の前でなされ、彼に対して助けを求めるメッセージとしての行動であった。さらにそれはダイアナのパーソナリティーに求めることができると林 直樹は指摘し、次のように述べている。

「自傷行為に関連する彼女の性格特徴としては、感情コントロール能力の弱さ、自己評価が

低く絶望に陥りやすいこと、自分の感情を認識し、それを言葉によって表現する能力の不十分さ、周囲の人びとにうまく自分を表現できないこと、自分の社会的役割や生き方に自信が持てないことなどが挙げられる」

さらに、うつ病や摂食障害による精神的負担の増大が自傷行為に追いやる要因である、と述べている。

林の指摘は、タトゥーママにもかなり当てはまるようである。

「人間にあってもっとも奥深いものは、皮膚だ。そして、骨髄や脳、感じ、苦しみ、思考するため……深みにあるために必要なすべてのものは……皮膚が作り出したのだ……下へと彫り進んでもむだなことですよ。先生、われわれは……外部皮膚なのです」とフランスの詩人ポール・ヴァレリーが呟いている。

この最も深い皮膚に刻印を繰り返すマリーゴールドのタトゥーは、やはり自傷行為であると考えざるを得ない。家族をひきつけておきたい、誰かに助けを求めたい、その表現であれば、それはリストカットとの類似性は強い。いや、逆に、リストカットの線状のその刻印こそが、いれずみそのものではないのか。幾筋もの線状が、確かに手首の内側の皮膚を飾っている、それは自分で刻んだいれずみである。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

- 小野友道：『人の魂は皮膚にあるのか』、主婦の友社、2002。
ジャクリン・ウィルソン（小竹由美子訳）：『タトゥーママ』、2004。
スティーブン・レベンクロン（杵淵幸子・森川那智子訳）：『自傷する少女』、集英社、1999。
ディディエ・アンジュー（福田素子訳）：『Le Moi-peau 皮膚－自我』、言叢社、1993。
林 直樹：『リストカット 自傷行為をのりこえる』、講談社、2007。
鷺田清一：『悲鳴をあげる身体』、PHP研究所、1998。
「自虐」『ウィキペディア（wikipedia）』より、2007年1月13日、09:32。

